



財団概要

1 沿革

当財団は昭和44年（1969年）に山之内製薬からの寄付を基金として発足し、疾患の成因の生化学的さらには分子細胞生物学的な研究および薬剤の生体内代謝の研究に助成し、がん、生活習慣病をはじめとする各種疾患の機序解明、治療薬の進歩に貢献してまいりました。

平成17年4月山之内製薬と藤沢薬品工業とが合併しアステラス製薬の誕生にともない、藤沢薬品工業が主たる出捐者でありました医薬資源研究振興会の事業を病態代謝研究会が継承する形で平成19年4月に財産を引き継ぎました。医薬資源研究振興会は、昭和21年（1946年）に設立され、昭和47年以降、薬のシードとなる新たな天然物を中心とする創薬資源の探索と応用研究に助成し、我が国の創薬探索を支援してまいりました。新生「病態代謝研究会」は、疾患の機序解明と創薬資源研究を融合的に進め、病気のメカニズムを踏まえ、分子標的に対する多様性をもった創薬資源からの画期的新薬の開発、および臨床における安全性と経済性の整合的な利用を開発する研究を助成する活動を行っています。

平成20年12月1日からの公益法人改革関連三法(新法)施行に向けて、ほぼ1年前の平成20年1月から財団事務局として公益財団法人への移行検討を開始しました。その後、移行検討会を立ち上げて議論を重ね、6月21日開催の理事会で公益財団法人への早期移行を決議、新法施行後の平成21年1月7日に厚生労働省に「最初の評議員選任に関する許可申請書」を提出、4月20日に許可を得て4月28日最初の評議員選定委員会開催、5月28日に移行申請書を内閣府公益認定等委員会に提出しました。7月16日の公益認定等委員会による第1回ヒアリング後、幾多の遣り取りを経て平成22年3月23日に内閣総理大臣より認定書を拝受致。平成22年4月1日に公益財団法人への移行登記を行い、移行申請書通り「アステラス病態代謝研究会」と財団名称も変更いたしました。

2 目的

当財団は、①生体の代謝を通して、疾患の発生病序およびその治療、特に治療薬剤の生体内代謝と疾病との関係を明らかにすることにより疾病と薬剤の代謝に関する 未開の分野を開拓することならびに②医薬資源の発見、開発に関する基礎および応用研究を奨励し、医学、薬学その他関連自然科学の進歩発展に寄与することにより、国民の保健と医療の発展および治療薬剤の進歩に貢献することを目的としております。

3 事業

当財団は、前条の目的を遂行するために次の事業を行います。

- 1) 疾患の診断および治療、特に治療薬剤に関する病態代謝学的研究の助成
- 2) 医薬資源の発見、開発に関する基礎および応用研究の助成
- 3) 未利用資源の調査ならびにその利用化に関する研究の助成
- 4) 研究業績資料に関する刊行物の発行および講演会、講習会の開催ならびにその援助
- 5) その他、当財団の目的を達成するために必要な事業

4 事業内容

本財団の目的に沿う研究への助成事業、研究報告会開催、刊行物発行等を実施しています。その主な概要は次のとおりです。

1. 助成事業

1) 研究助成・海外留学補助

「疾病の解明と画期的治療法の開発に関する研究」であり、「独創性、先駆性が高い萌芽的研究提案」を支援します。領域は特に問いません。

<助成対象研究>

- ①疾患の基礎的研究（遺伝子、タンパク質、病態、診断法、治療法、iPS細胞を用いたあるいはエピゲノムに注目した疾患の解明など）
- ②創薬化学研究（合成化合物および合成技術、天然物、抗体医薬や核酸医薬を含むバイオ医薬、細胞治療、DDS等の先端技術の開発とその応用、ならびに創薬段階におけるヒトに対する安全性予測研究）
- ③基礎生命科学研究〔細胞生物学、ゲノム科学、構造生物学、システム生物学、さらには、物理、化学、数理情報科学からの生命科学への展開（SBDD、分子動力学、ギガシークエンサー、イメージング、化学反応機構など）〕
- ④臨床研究（ヒトを直接の対象とした上記趣旨に合致した研究。疫学研究、コホート研究を含む）

<特色>

「個人型の研究」、「女性研究者」、「教室を立ち上げたばかりの研究者」、「留学から戻られたばかりの研究者」を支援。

<助成交付者数・交付金額>（病態代謝研究会のみ）

項 目	期 間	交付者数	交付金額
研究助成金（研究奨励金）	S44年（設立）～H23年	2,964名	2,185,300千円
海外留学補助金	S58年～H23年	376名	287,600千円
総 計		3,340名	2,472,900千円
最優秀理事長賞	H16年～H23年	（18名）	18,000千円

注1：最優秀理事長賞は副賞ですので研究助成金とは別に集計。ただし、受賞者全員が研究費として使用していますので、助成総額は副賞分も含め2,490,900千円とさせていただきます。

注2：平成19年4月に事業継承した医薬資源研究振興会分（1,357名、1,223,900千円）との合算累計は、交付者数：4,697名、交付額：3,714,800千円 となります。

注3：平成23年度は、東日本大震災の被害に遭われた研究者の早期復興を祈り緊急研究成金を公募により交付しました。詳細は本財団報P6-9に記載の通りです。これらも合わせると助成交付累計は、交付者数：4,791名、交付額：3,736,150千円 となります。

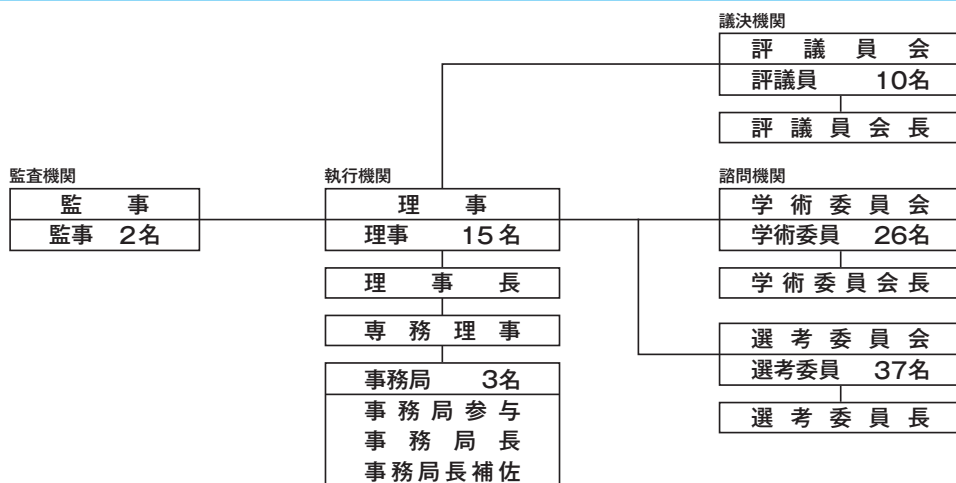
2) 研究報告会

前年度に交付した研究助成金により実施された研究の成果発表を目的に毎年10月に研究報告会を開催。

3) 刊行物

- (1) 財団報：当財団の一年間の活動をまとめて、機関誌として発行。
- (2) 助成研究報告集：研究報告会で発表された研究成果を研究年報として発行。

5 組織と人員（平成24年3月31日現在）



6 評議員・役員・職員名簿（平成24年3月31日現在）（五十音順・敬称略）

■評議員 評議員会長 評議員

石井 康雄	アステラス製薬株式会社
磯部 稔	国立清華大学（台湾）
江端 貴子	衆議院議員
神谷 一夫	神谷税理士事務所
佐藤 公道	安田女子大学
猿田 享男	慶應義塾大学
杉山 雄一	東京大学大学院
田嶋 尚子	東京慈恵会医科大学
長嶋 憲一	東京21法律事務所
野田 哲生	がん研究会

■理事 理事長 専務理事 理事・選考委員長 理事

（兼学術委員長）

児玉 龍彦	東京大学
塚本 紳一	アステラス製薬株式会社
門脇 孝	東京大学大学院
小川 久雄	熊本大学大学院
内田 渡	アステラス製薬株式会社
堅田 利明	東京大学大学院
倉智 嘉久	大阪大学大学院
後藤 由季子	東京大学
杉浦 幸雄	同志社女子大学
須田 年生	慶應義塾大学
中里 雅光	宮崎大学
長野 哲雄	東京大学大学院
廣崎 晴久	アステラス製薬株式会社
藤井 信孝	京都大学大学院
泉二 登志子	東京女子医科大学

■監事

大山 悦夫	税理士法人 タックス・マスター
桧井 正剛	アステラス製薬株式会社

■学術委員 学術委員長（兼理事） 学術委員

後藤 由季子	東京大学
一條 秀憲	東京大学大学院
稲葉 俊哉	広島大学
井上 将行	東京大学大学院
上田 啓次	大阪大学大学院
大隅 典子	東北大学大学院
大谷 直子	がん研究会
小川 佳宏	東京医科歯科大学
尾崎 紀夫	名古屋大学大学院
笠井 清登	東京大学
熊ノ郷 淳	大阪大学
塩見 美喜子	慶應義塾大学
袖岡 幹子	理化学研究所
高柳 広	東京医科歯科大学大学院
竹居 孝二	岡山大学大学院
徳山 英利	東北大学大学院
長澤 寛道	東京大学大学院
中村 栄一	東京大学大学院
中山 俊憲	千葉大学大学院
根岸 学	京都大学大学院
南 雅文	北海道大学大学院
三輪 聡一	北海道大学大学院
柳田 素子	京都大学大学院
山下 敦子	理化学研究所
山本 一夫	東京大学大学院
若槻 壮市	高エネルギー加速器研究機構

■職員 事務局参与 事務局長 事務局長補佐

山下 道雄	アステラス製薬株式会社
石川 弘	アステラス製薬株式会社
尾崎 まり子	アステラス製薬株式会社

財団法人「病態代謝研究会」設立趣意書

近年医学の進歩は誠に目をみはるものがありますが、その原因の一つに医学的研究の手段として、物理的、化学的手段が大幅に導入されつつあることを挙げる事が出来ましょう。

医学の研究は、人体を形態的な面から追求することにより始まり、長い年月と多くの研究によって解剖学、組織学等の形態学が発達し、やがて、機能面の追及により、生理学が発達して、今日に至りましたが、生理学から、化学的分野が分化独立して、新しく生化学が体系づけられ、近代医学の基礎が作られました。

従来、形態学的、生理学的に捉えられていた疾病像が化学的に追求されるに及んで、人体に関する知識も革新され疾患の診断並びに、治療を、生化学的な目で見直す時期に到達いたしました。

その後、生化学の著しい進歩によって、生命の根底をなしている蛋白質の生合成、核酸の役割等が、次第に明らかになり、今や人体の機能は、分子の段階で解明されつつあり、分子生物学と呼ばれる新しい生物学も台頭してきています。

このような生化学の進歩に伴って、疾病の診断および治療上、生化学的所見が極めて重要な要素としてとりあげられるに至りました。

しかしながら疾病の把握は、病理学や病態生理学に生化学的視野を加えて、始めて完全となるのかかわらず、生化学一般の目ざましい進歩発展に比し、病態それ自体の生化学的研究はまだ必ずしも十分体系づけられたとはいえません。従って現在各種疾患に対して更に高度な病態代謝学的アプローチが強く望まれております。

このような背景のもとで、私共は、疾病に代謝の面から光をあて、病態代謝学的研究を助成し、疾病の発生機序、体質および老化の機構を生体代謝または、分子生物学的観点より追及し、併せて、その治療薬剤との関係をもあきらかにすることにより、医学、延いては、薬学の未開の分野を開拓し、国民の保健および医療の進歩と病態生化学の体系化とに些かなりとも貢献することを期して、この度、財団法人「病態代謝研究会」を設立し、寄附行為記載のごとき事業を行なおうとするものであります。

(昭和44年7月31日 財団法人 病態代謝研究会 設立許可申請書より原文のまま転記)

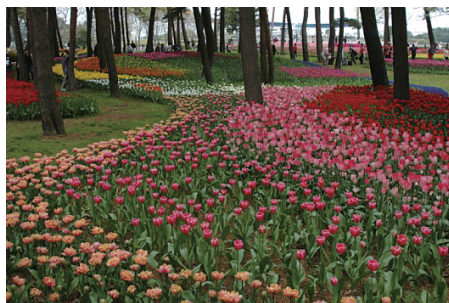
V ご寄付の報告とお願い

平成23年4月から平成24年3月の1年間に、医薬資源研究、病態生理・薬理研究、画期的な治療法を早期に生み出し、すみやかに患者さんの手元に届けられるような研究の奨励の一助にと、下記の通りご寄付をいただきました。頂戴しましたご寄付は研究助成事業の推進のため有効に活用させていただきます。

アステラス製薬株式会社 様	461,350,000 円
竹中 登一 様	10,000,000 円
藤澤友吉郎 様	100,000 円
山下 道雄 様	20,000 円
石川 弘 様	10,000 円

当財団は今後とも研究助成事業を通して、より幅広く生命科学分野の研究に貢献して参る所存ですが、そのためには更なる事業基盤の充実が必要です。こうした趣旨をより多くの皆さまにご理解いただき、当財団へのご寄付について格別のご配慮を賜りますようお願いいたします。

なお、当財団は平成22年4月1日から公益財団法人に移行しました。公益財団法人は、教育または学術の振興、文化の向上、社会福祉への貢献その他公益の増進に著しく寄与するものとして認定された法人で、これら法人に対して個人または法人が寄付を行った場合は、その個人・法人ともに税法上の優遇措置が与えられます。詳しくは当財団事務局（電話：03-3244-3397、Eメール：byoutai@jp.astellas.com）までお問い合わせください。



編集後記

～東日本大震災と緊急研究助成金公募を振り返る～

ここに、アステラス病態代謝研究会の機関誌「財団報」の第5号（平成23年度版）を予定通り発行することができました。これもご協力いただいた多くの皆様のお陰です。この場をお借りして深謝いたします。

平成23年度は、東日本大震災からちょうど20日経ったところからのスタートとなりました。東北や北関東では多くの方々が被災されました。津波や原発事故の映像がテレビに映し出されるたびに暗い気持ちになりました。オフィス内も晴れの日には消灯し外部の明りだけで仕事をしていました。そうするうちに財団役員や知人の研究者から徐々に被害状況が入って来ました。幸い皆さん大きな怪我もなく、無事が確認できましたが、宮城、福島、茨城にある先生方の研究室の被害は想像を遥かに超えるものがありました。

大震災直前の2月28日に私が訪問した財団学術委員で東北大学大学院医学研究科の大隅典子先生のお部屋での地震発生時の様子を、先生のブログにより知ることができました。『ちょうど学生さんとディスカッション中で、かなりの横揺れになったので、慌てて二人でテーブルの下に隠れ、その間に、淹れてもらったコーヒのカップが落ちるわ、書棚から書類が振ってくるわ、キャビネットが倒れるわ、テレビで見たことのあるような情景だったが、揺れがひとまず収まった時点で、ラボメンバーに声をかけて、外階段で地上に降りました。…。(翌日) 正午頃に来られるメンバーで集合して、壊滅状態の研究室を少しずつ片付け始めた。まだ余震が続いているので、とにかく、動線確保を原則で片付けて、小部屋によっては現状復帰に近いものもあるが、顕微鏡やクリーンベンチなどの破損はどうしようもない。』とても他人事とは思いませんでした。

そんな中で私は、被災された先生方に対し何かできることはないだろうかを考えるようになりました。復旧には相当の月日が掛かりそうだと感じましたが、長い年月を掛けて築き上げてきた研究成果である貴重な化合物、細胞や酵素、動物などを一瞬にして失った先生方には、一日も早くそれらを再取得して頂き、世界との競争に勝って頂きたいと願いました。地震後のすさまじい映像と敗戦による廃墟のイメージが重なり、「資源も何もないところから再起するためには無から有を生ずるような科学および技術の振興を図る必要がある。医薬品の資源の調査、研究に資金と人材を投入し、人類最大の災禍の一つである疾病の予防と治療に資する医薬品の研究に力を尽くしたい」という財団設立時の先人の思いが頭をよぎりました。現在ストップしてしまっている生命科学的研究を一日も早く復旧・復興するために役立つ活動こそ当財団らしい活動であり、すぐに実行できるかを探ってみようという思いを強くしました。そして、事務局内で議論をしたのち、理事長、主要役員、内閣府等に相談し、「東日本復興 緊急助成金交付事業」を現行の公益事業の延長上で実施することが決まりました。内閣府からは、定款を変えることなく実施可能との見解も得ました。（定款の変更が一番大変だと思っていましたので、「定款変更の必要無し」という見解は背中を押して頂いた気がして、飛び上がるほど嬉しかったことを今でも鮮明に覚えています）。

その活動の概略をP2以降の事業報告の項で紹介させていただきました。緊急研究助成金交付者一覧表や感謝状の紹介もさせていただきましたので、本財団報は前号より4ページ増やしました。とはいえ限られた紙面で詳しく紹介しきれませんでした。当財団のHP（裏表紙に記載のURL）には緊急研究助成金の応募要領と共に交付者からのお便りを掲載させていただいています。ぜひアクセスしてみてください。

毎号好評の受賞者・交付者からのご寄稿文ですが、今回も多様性を考慮して依頼させていただきましたところ、多くの先生方から素晴らしい文章とお写真を頂戴することができました。本当に有難うございました。当財団の主たる助成対象者である若手研究者、女性研究者からの寄稿文を読んでいると、元気いっぱいの彼らの姿が見えてきます。ぜひともご一読いただき、ご感想をお寄せいただければ幸いです。

今年の夏は、とても暑く、西日本では大雨の被害も沢山出ました。日本も亜熱帯になったのではと思えるほどでした。また、ロンドンオリンピックでは連日のメダルラッシュについて夜更かしをしてしまいました。チーム競技、団体種目での若いアスリートの活躍で盛り上がりましたが、これらの種目で多くのメダルを獲得するのはある意味で日本人の特性をよく表していると思いました。最近の若者は安定志向で企業研究者を目指し博士課程に行きたがらない、海外留学に行きたがらないという話を良く耳にしますが、先程書いた若手研究者だけでなく、ここにも頑張っている若者の姿を見付けて元気をもらいました。

今こうして編集作業を終え読み返してみると、今年も素敵な文章やお写真をお寄せいただいた先生方、私なりの大雑把な編集を元に素晴らしい色とレイアウトで各ページの見栄えを良くしてくださったベスト・プリンティング様のご協力によって、とても良い財団報に仕上がったと思います。改めて、感謝申し上げます。

事務局参与 山下道雄

財団報 No. 5

非売品

発行	2012年9月15日
編集	山下 道雄
発行者	児玉 龍彦
発行所	公益財団法人 アステラス病態代謝研究会 〒103-8411 東京都中央区日本橋本町2-2-10 TEL: 03-3244-3397 FAX:03-5201-8512 E-mail: byoutai@jp.astellas.com http://www.astellas.com/jp/byoutai/index.html
印刷所	株式会社 ベスト・プリンティング

不許複製 禁無断転載